GLUTTONS!

琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＬＵＴＴＯＮＳ！

【Ｎコード】
Ｎ３４９７Ｙ

【作者名】
琳

【あらすじ】
私、神崎りつは学校から帰る途中に、どうやら異世界に飛ばされてしまったようです。元の世界には、もう戻れなくても構わない。・・・・・・ん？もしかして、これは召喚ってやつですか！？勇者の件なら任せて下さい。おいしいご飯とふかふかなベッドを確保してもらえるなら喜んで！・・・・・・と思ったら、召喚の間じゃなく広大な草原に。ここどこだよ！？
容姿、成績共に平凡で、取り柄といったら脚の速さの私が、かっ

こいいのにどこか抜けてる勇者とグルメ旅、もとい世界を救う旅に出る！

こたつといえばみかん（前書き）

初心者なので生温い目で見てやってください。コメディ感をうまく出せるよう頑張り、マス。

こたつといえばみかん

それは何の変哲もない、寒い冬の間のとある一日になる予定、だった。
一昨日や昨日と変わらない、今日と明日の違いは日付だけなんていうような、そんな普段通りの日。
「さみー・・・・・・」
鼻をズズッと啜りながら、私はいっそう深くポケットに両手を突っ込む。
ホッカイロを持って学校に行くべきだったと後悔した。ちなみに私は断固貼らない派である。
「まぁでも、もうちょいで家着くし」
通りに誰もいないのをいいことに、独り言を続ける。
いつものようにだらだらと授業を受けて、数少ない友人の一人と昼ご飯を食べて、午後の授業が終われば即下校した。
もう、部活には入ってないので今は大手を振ってご帰宅の途中である。
（家帰ったらこたつでぬくぬくしよう）
うへへ、と緩んだ笑みを浮かべる。

と、冷たい風が吹きつけて私はウッと呻いた。
寒い。特に太股が辛い。辛すぎる。
女子高生のおみあしになんて仕打ちを！貴様、断じて許さん！
と、心の中で自然の脅威に立ち向かってみる。
――――――ザアァッ。
私の心の声が聞えたのか、いっそう強く風が吹く。

「うひゃあ」
間抜けな声をあげて私は風を睨みつけようと・・・・・・クソ、睨めない！
そんなバカなことをしている内にも、風は強く吹きつけてくる。道端に寄せられていた落ち葉が舞い上がり、木々が風でザワザワと鳴った。
風力強すぎじゃね！？スカート押さえるので必死なんですけど。
両手でスカートを押さえ、私はローファーの先をじっと見つめた。
正確には、足のついている筈の地面を。
（沈んでる・・・・・？）
見慣れた硬質のアスファルトが、ぐにゃりとひしゃげたような気がした、途端。

地面が消失した。

え。

なに、なんで。

どうして。

「えええええぇぇぇぇうぃんがーでぃあむれびおーさあああああぁぁぁイヤアアァァアァ！！！」

・・・・・・とっさに本で読んだ呪文を唱えてみたけど、ダメでした。

こたつといえばみかん（後書き）

異世界ものを書くのは初めてなので、読んでいて気になる点などがありましたら、知らせて頂けると助かります。

にゅうはくしょくといえばおんせんのもと

耳元で唸っていた風の音が、ふっと遠ざかる。
同時に見慣れた景色が瞬く間に色褪せて、あたりは何も無くなった。
ただただ、どこまでも乳白色の世界に私はいた。
くんくんと匂いを嗅いでみたが、何の匂いもしない。
「なに、これ」
乾いた声が咽喉から零れる。状況を把握しようと、私は必死に頭を働かせた。

その一、夢を見ている。
「一番あり得るな、うん」
その場合、いつから夢だったんだろうか。
学校に行ったのも夢？
それともっと前・・・・・・だったら、いいのに。
「・・・・・・考えても仕方ないか」
そう呟いて私は頭(かぶり)を振った。

その二、・・・・・・。
どうせ、その一だろうけど。
もしかしたら、ひょっとして。
「い、異世界に飛んじゃってたりして」
ちょっとだけわくわくした声だったのは気のせいだ、うん。
『おぉ・・・・・・！あなたがこの世界を救ってくださる勇者様なのですね』
みたいな！すっごい美少女に感謝されちゃったりね！美形騎士と魔王を滅ぼす旅に出ちゃったりね！

「うへへ」
夢なのをいいことに、現状把握を放棄して思いっきり妄想してみる。
勇者なので丁重に扱われ、美味しいご飯とふかふかなベッド、つまり高級な宿！
いくらネットに溢れている異世界モノだって、そんな都合の良い世界は無いだろうけど。
妄想の翼は自由に羽ばたくのだ！（キリッ

おっと、よだれが・・・・・・と口を拭きかけた時、突然身体が落下した。
「うぁっ！？」
いきなり体重増えた！？いやいやそんなバカな・・・・・・間食減らそう。
やみくもに手足をバタつかせてみたが、何も変わらない。
落ちているという感覚はあるものの、辺りは相変わらず乳白色である。
何故か自分の手や制服はクリアに見えるけど。
温泉の素みたいだな！

――――――――――――――――

・・・・・・どのくらい経ったのだろうか。
「まだかなー・・・・・・」
私は相変わらず落ち続けていた。
落下速度は徐々に緩やかになり、今はたんぽぽの綿毛が地面に落ちるのより少し速いくらいのスピードである。安全運転、大事ですね。
不思議の国のアリスに、こんな場面があった気がする。
私もイスが欲しい！
ここに来るまでに持っていた鞄の中に読みかけの小説が入っていたから、あれがあれば退屈しないんだけどなー。

「うーん」
「あー、あああぁー」
「ざーんこーくなてっんしの・・・・・・」

――――――暇です。すぺくたくる暇です。
トイレ行きたくなりませんように。あ、考えると行きたくなるからダメだ。
「うおりゃっ」
考えを紛らわそうと、落下しながら準備運動が出来るかどうか試してみた。ダイエットになるね！
「いっちにーさんしー・・・・・・」

結論。しゃちほこは無理でした。

肩入れとか屈伸は出来たけどね！カロリー消費ＤＡ☆ＺＥ

そんなこんなで？時間を潰していると、一筋の光が雲の切れ間から溢れてくるように私の足元から上ってきた。
どのくらい下から照らしているのか解らないが、ゆっくりとその筋は広がってくる。
やがてその輝きが全身を包み、私は眩しさにまぶたを瞑った。
異空間（トンネル）を抜けたら、別世界だった、なんてこともしかしたらあるかもしれない。

その際は勇者オプションで色々贅沢出来ますように！

そんな不埒（ふらち）な願いを抱きながら、私は光の奔流に呑み込まれたのだった――――――。

だいしぜんといえばたき（前書き）

ついに他の登場人物がでます。

だいしぜんといえばたき

まぶた越しでも、静謐な光を感じる。
正視する事の出来ない白光がしばらくの間私を包み込んだ。

・・・・・どのくらい経っただろうか。
数秒とも数時間とも判別のつかない『時』は、わずかな変化によって終わりを告げた。
網膜に伝わってくる光の種類が変わったのだ。
白妙から、懐かしい赤黄色へと。
それは陽射しだった。確かに感じる、太陽の存在。
私は喜び勇んで目を開き、・・・・・・え、みどり？
何この全てみどりっｔ

――――――ドサッ。

「あぐふっ！」

腰から頭のてっぺんを貫く衝撃に、私は息をゴホッと吐いた。

簡単にいえば尻もちをついたのである。
「っ痛たた・・・・・・」
若干涙目になりつつ、視線を前にさだめると。

・・・・・・見渡す限りの大草原が広がっていた。思わず言葉を失う。
青々とした緑野を、ビュウッと心地よい風が吹き抜けていく。
肩まで伸びた私の黒い髪も風で舞い上がった。
「うわぁ・・・・・・」
驚きで涙も引っ込んだ。何これパネェ。
しゃがみ込んでいるせいかもしれないが、辺りには家一軒見当たらない。どこまでも、生鮮な緑草が風になびいているのが見えるだけだ。
キャパシティオーバーした私は、座り込んだまま口を半開きにして、ポカンと大自然を眺めていた。
徐々に、思考能力が回復してくる。
どゆこと。
どういうこと。
まさか本当に、異世界？

「――――――おい」
不意に、背後から低い声が聞えたのはその時だった。
ビクッとして後ろを振り向く。
目に入ったのは人の脚だった。
いい脚してそうだなー。
ついつい癖で筋肉のつき方などを観察してしまう。
茶色いだぼっとしたズボンを穿いているせいでよくは解らないが、引き締まった筋肉を持っているようだ。
そのまま視線を上へ持ち上げていく。

少し汚れた木綿っぽいシャ、ツって・・・・・・ん？
なんか。
剣みたいなものが腰に引っ掛けてあった、ような。
ぎこちなく目を下へ戻す。
平和を掲げる国の民としては、アニメやマンガでしかお目にかからないそれを、しっかりと我が目で確信し、私は大声をあげたい衝動にかられた。
ええええええ！！なにこれ！いや剣だけど。剣だけどさぁ！
「おい」
再び声をかけられ、反射的に上を向く。
すると射抜くような鋭さを持った深緑の眸と、ばっちり目が合ってしまった。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

第一村人？発見です。

ごえんをたいせつに

原っぱのまんなかで、剣を持ったに―ちゃんに出会いました。
黙って睨み合っていても仕方ないので、挨拶する。コホン。
「こんにちは！」
「・・・・・・・ふもとの町の人間か？」
私の勇気を振り絞った挨拶がアァ！お主・・・・・・なかなかやるな。
って、そんなことより、あの。
今更なんですけど。
「ここ、どこですか？」
異世界だったりしますか？
「・・・・・・・」
男の形の良い眉が訝しげに寄せられる。さっきから思っていたけど、イケメンだな！
私の茶色の混じった黒髪とは全く違う、鴉の濡羽色の髪。長さは耳が隠れるくらいだ。
すらりと通った鼻筋の下には、薄い唇が閉じられている。
ひとつひとつのパーツは首尾よく顔に収まっている。が、眉をしかめているせいかやたら怖そうに見える。つか怖い。
「アルフェニア王国だ」
へー。あるふぇにあ。どこぞのウサギさん家族を彷彿させる名前だ。
いや、そんなに似てないか。
っていうか、やっぱりここは異世界か。
そうかそうか。ほおおぉ。
「ここはレバノンという町の近くの草原で、」

「っざけんなああぁ！！！」
説明を続けようとしてくれた彼の言葉を遮ったのは、質問した張本人だった。

「おいおいおいおい異世界トリップっていったらセオリーは召喚の間だろそれがなんでこんな大草原に放り出されてんの私！？誰だ呼び出したのは下手くそな術使いやがって位置の特定が出来てないだろうが！！」
私の美女とおいしいご飯を返せえええぇぇ！

魂の叫びは、澄んだ風に運ばれていった。ノンブレスで言ったせいで、呼吸が多少乱れる。
息を整えたのち、ハッと我に返って青年の方を見ると、無表情のまま固まっていた。あれ、さっきより距離が広がってません？
「あ、すみませんちょっと取り乱しちゃって」
あはは、と愛想笑いをしてみせる。
と、にーちゃんが少し近寄って膝を折った。さっきよりも顔が近くなる。おお、近くで見てもいい男。
彼は少し逡巡した様子を見せた後、私にゆっくりと話しかけた。

「ふもとに病院があるから、一緒に行こう」
「私は大丈夫です！！」
なんてことだ、危ない人認定されていたとは。
力いっぱい否定する。
「心配するな、酷い事はしない」
「だから大丈夫だってば！？」
お願いだから気の毒そうな目で見ないで下さい。
誤解を受けるような真似をしてしまったのは私だけど、傷つく！
「あの、違うんです」

私は慌てて両手を振る。
「私、この世界の人間じゃないんです」
・・・・・・うん、言葉の選択間違えた。
もう強引に病院まで引きずられるんじゃないか、と及び腰で彼に視線をやると、意外にも難しそうな顔で考え込んでいた。
しばしの間、草が揺れる音だけが空間を支配する。
「・・・・・・俺はさっきまで、この草原にひとりで立っていた」
彼はおもむろに口を開いた。
「気配はなかった。だが、お前は突然俺の前に現れた」
まるで、うえから落ちてきたかのように。
じっとダークグリーンの瞳に見据えられ、私は動けない。
緊張で喉がコクッと鳴った。
「さすが異世界人だな」
・・・・・・。
「えっ、信じるの？」
いや、疑われても困るけど。
だけどあんまりにもあっさり目の前の彼が納得したので、返って心配になる。
「信じるも何も・・・・・・別の世界から来たんだろ？」
若干首をかしげるにーちゃん。
「う、はい」
「じゃあ、そうなんだろ」
面白い服を着ているな、と相変わらずの真顔で言う男に、私は拍子抜けした。
普通信じないだろ。と思いつつも、この世界において異分子である私を認めてもらえた事に安心したのも事実だ。
帰りたいなんて気は起きない。
あの世界に戻りたくなんて、ない。

「信じてくれてありがとうございます。私は神埼りつといいます」
草を掃って立ち上ると、一礼して名を名乗る。
「・・・・・・ところで、私今何語しゃべってますか？」
絶対日本語じゃない気がするよ！

彼の名はギイ・アルゴスといった。
ちなみに私達はこの世界の共通語である、ファルード語とやらを使って会話しているらしい。わー私ってばバイリンガル！
一通り自己紹介をした。ギイはひとり旅をして世界を周っているらしい。何が目的なのかは言わなかったので、私も訊かないでおく。
「ところで、リツはこれからどうするんだ？」
町まで送ろうか、と言ってくれたギイに私はにっこり笑った。
「ええ、あなたと一緒に旅をしようと思います」
深緑の目が大きく見開かれる。
ここで会ったのも何かの縁。日本人は人とのつながりを大切にするのだ。

・・・・・・まぁ本音をぶっちゃければ、心細いので逃がしません！とゆーことです。

おねがいはじょうずにやりましょう

あなたと一緒に、旅をしようと思います。

そう私が告げると、何故か彼は固まってしまった。
青い野原にビュウッと風が吹く。
「・・・・・・お、俺と旅を？」
困った表情をしているギイ。
しかしここは、押して押して押しまくるしかない！
「はい。・・・・・・いきなりこの世界に来たばかりで、右も左もわからないですし、みんながあなたみたいに信じてくれるとは限りません・・・・・・。心細いんです、どうか一緒に連れて行って下さい！」
胸の前で両手を握り締め、目をうるうるさせて懇願する。
必殺、父にお小遣いを強請る。の応用版だ。
乙女のお願い（笑）に、表情を変えないギイ。・・・・・・あ、よく見ると冷汗垂らしてる。
「しかし、俺は危険な場所に行ったり」
「足手まといなのはわかってます！でも、なるたけ迷惑かけないようにするので・・・・・・ダメですか？」
わざと断りにくい空気を作り出す。
すると、ギイは深いため息をひとつ吐いた。
「男と二人きりで旅する事になるんだぞ。若い女性には辛いだろう」
いいのか？
真剣な色を帯びた鉄色の双眸が私の顔を覗き込む。

私はその目を見つめ返し、きっぱりと言った。
「構いません。ギイさんからしたら私なんてガキでしょうから、間違いも起こらないに決まってますし」
だってこのにーちゃん、最低でも二十(はたち)歳は超えていそうだ。
その答えを聞き、ギイが少し訝しげな顔になった。
「お前、俺をいくつだと思ってる？」
「え？二十超えてますよね」
みるみるうちに彼の表情がドーンと暗くなる。
あれ？
「・・・・・・・なだ」
「えっ？」
ボソッと彼が呟いた言葉を拾えず、訊き返すと。
「十七だ！」苛立ちの滲んだ返事が返ってきた。
「マジで！？」
ひとつしか変わんないじゃん！
驚愕すると、ますますギイの顔が暗くなる。
こ、これはまずい。早急にフォローが必要だ。
「あら、とっても凛々しい顔立ちだし、雰囲気も落ち着いてるから勘違いしちゃいました！」
内心ダラダラ汗を掻きながら笑顔で褒めてみる。
「・・・・・・別に、無理しなくていい」
どこか拗ねた口調でそっぽを向くギイ。
「歳も近くて心配だろうから、やはりふもとの町で、」
「お願いします！！せめてこの世界に慣れるまでは一緒にいさせてええぇ！！！」
必死の形相で彼に近寄った。
ここで手放してなるものか。
それに、あんなにあっさりと事実を受け入れてくれた彼に興味がある。
このままお別れしてしまうのは、何となく惜しい気がするのだ。

「大丈夫です心配なんてこれっぽちもしてません！だからっ、ね！？」
ググ、と彼の目を見つめる。
「わ、わかったから。そんなに詰め寄るな」
若干逃げ腰になりながら、彼はようやく頷いてくれた。
「ありがとうございます！！」
ターゲット確保成功です！

「では、改めてよろしくお願いします、ギイさん」
適度な距離を置いた後、そう言って手を差し出す。
「ギイでいい。あと、敬語も止めてくれ」
ギイ曰く、共に旅をする相手に敬語を使われたら、気が休まらないとのこと。
「わかりました、じゃなくてええっと、わかった」
正直丁寧な言葉遣いとか苦手なので、その申し出はとても有難い。
もう一度言いなおす。
「これからよろしく、ギイ」
「あぁ、よろしく頼む」
握ったギイの手は大きくがっしりとしていて、堅いまめが何個か出来ていた。

異世界に来て一日目。
私はこの親切な彼が一体何者なのかということに、全く気付いていなかった。

おねがいはじょうずにやりましょう（後書き）

もう少し一話一話が長いほうが良いかな？書いていて少し悩みます。

くうふくはさいこうのすぱいす（前書き）

一応残酷描写付けました。

くうふくはさいこうのすぱいす

ギイの旅に同行することが決定し、私は元気よく声を張り上げた。
「ではっ、出発！」
・・・・・・どこ行くんだっけ？
チラッ、とギイを見る。
「レバノンに向かう。そこでお前の服も揃えられるだろう」
あと、靴も。
彼の視線がローファーに寄越される。
確かに、この靴歩きにくいんだよなぁ。
ちなみに彼の靴は、しっかりした造りの黒い革のブーツだった。登山に便利そうですね！
ギイが地面に置いてあったザックを拾い上げる。私は手ぶらだ。
わーい！アッハハ、鞄どこ行ったんだろ。
「よし、行くか」
「うん！」
何はともあれ、出発です！

――――――――おおよそ6時間後。
私達は草原を抜け、森の中に入っていた。
ここを抜けた先にレバノンという町があるらしい。草原から歩いて

約半日程の距離とのこと。
ギイ曰く、「近い」。
しれっと真顔で言っていた。何この人怖い。
　ごろごろ石が転がっている道を、先頭のギイが迷わず歩いていく。
「・・・・・・っ」
少しずつ呼吸が乱れてきた。ここ最近ろくに運動していなかったツケが、体力とおなかの肉に回ってきている・・・・・・ちいいっ。
　一旦立ち止り、膝に両手をおいて呼吸を整えた。
「休憩するか」
少し離れた所からギイの声が聞え、私は頭を横に振る。
「大丈夫、すぐ追いつく」
その体勢のまま視線を前へ向けると、彼は暗くなった空を見上げていた。
木々の隙間から見える上天は、夕暮れから紫黒の深い闇へと変わってきている。
「あと少し距離を稼いだら、今日は終わりにしよう」
じきに道が闇に覆われてわからなくなる。そう言葉を続け、ギイが歩き出した。
私も姿勢をしゃんとして踏み出そうとする。

――――――背中が、ゾクリとした。

反射的に身体が動き、私は横に飛んだ。
「リツ！」
ギイが駆け寄り、私の前に立つ。
彼の背中越しに、さっきまで私が立っていたところが見えた。
土が深く抉られている。
「グウゥル・・・・・・」
唸り声が張り詰めた空間に響いた。狼によく似た獣が、毛を逆立て

てこちらをねめつけている。
ギイがすらりと剣を抜き、刃が冷たく光ったのが見えた、途端。
――――――ザンッ。
獣が倒れ込んでいた。
もうピクリとも動かない体から流れ出す血が、土に染みていく。
暗がりの中で赤い液体を見つめていると、私の中にも何かが染み込んできた。
それは、これまで本当には感じていなかった現実感。
どこか浮揚していた気持ちが、重みを持ってズドンと落ちてくる。
・・・・・・あぁ、ここは。
本当に、私のいた世界じゃないんだ。
ふと家族の顔が思い浮かんで、シャボン玉のように淡く消えた。

「よく避けたな」
ギイの声で私はハッと我に返った。
「なんとなく、ね」ぎこちなく笑う。
「動くのが遅れて悪かった」
顔をしかめてギイが謝るのを、私は慌てて否定する。
「そんなことない！助けてくれてありがとう」
彼がいなければ、死んでいただろう。
すると難しい顔をしたまま、ギイが獣を覗き込んだ。
「・・・・・・よし、食おう」
「食えんの！？」
えええええぇ！！
ちょっとシリアスだった空気がぶち壊しです、いや、いいんだけど。

木の根元まで獣、（カルというらしい）を引きずっていき、火を起こす。
そこら辺に散らばっていた乾燥した枝を放り込むと、炎が赤々と燃えあがった。
「おぉ・・・・・・あったかい」
ギイはカルの解体作業中だ。
カルは雑食で、気紛れに旅人や他の動物を襲って食べることもあるが、基本的には木の実や草を食すので肉が柔らかいらしい。
正直、大丈夫なのか？と思っていたので、ちょっと期待が高まる。
ウへへへ。
　ギイが切り分けた生肉を小枝に突き刺し、火で炙（あぶ）っていく。
しばらくすると、香ばしい香りが辺りを漂い始めた。
「食べ頃だな」そう言うとギイが肉にかぶりついた。
「いただきます」
私も匂いに惹かれてカルを口にした。
――――――味付けをしていない分、口の中に肉の旨味（うまみ）そのものが広がっていく。
ちょうど良い焼き加減が、硬すぎない肉にピッタリだ。
「口に合うか？」ギイが小首を傾げる。
「うまい！すごいうまい」
満面の笑みでそう返事をすると、ギイが満足そうに頷いた。
どんどん食え、という彼の言葉に甘えて、次に手を伸ばす。
「火傷するなよ「アツッ！！！」
・・・・・・くひのなかがいひゃい。
「お前、バカだろ」
半目になったギイに、私は何も言い返せなかった。なぜって、肉で口の中がいっぱいだったからね！べっべつに、本当の事だから言い返せなかったとかじゃなんだから！

ギイと2人で美味しくいただいたが、流石にまるまる一頭は食べ切れなかった。
そのままにしておくと獣が寄ってくるので地面を掘って埋めておく。ごちそう様です。
たき火は交替で見張ることにした。トップバッターは私だ。
真っ暗な森の中で、炎のまわりだけが明るく照らされている。
火の気が弱まりそうになったので枝をくべていると、ふぁ、と欠伸がでた。
たき火の向こう側で寝ているギイの後頭部を見つめる。
規則正しい呼吸が聞え、ひとりではないという事実を再確認してホッとする。

親切な人だなぁ、としみじみ思った。迷惑ばっかりかけているのに、嫌な顔一つせずにいてくれる。
「私、ヒモじゃん」
まずくね？
何ていうか、人として！
自分にできること。役に立てる、なにか。
それを早く見つけたいと思った・・・・・切実に。
「ま、とりあえずは火の番だな」
んー、と伸びをして、ポイッと葉の付いた枝をくべる。パチパチと火がはぜ、真っ赤な火の粉が闇に踊った。

2時間ほど経った頃、ギイを起こす。そろそろ交代の時間だ。
ギイ、と呼びかけると、本当に寝てたのかと疑うくらいスッと身を

起こした。
「交代の時になったら起こしてね」
そう言って彼の貸してくれた灰色のマントに包まって横になる。
慣れないことづくめで疲れていたせいか、私はあっという間に眠りに引き込まれていった――――――。

くうふくはさいこうのすぱいす（後書き）

評価やお気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます！＾＾やる気が湧きます。

さかなはやっぱやきたい

何かが聞える。澄んで美しい爽やかな声。
「・・・・・・・ぃ」
あぁ、鳥の鳴き声だ。ピィーと高い音で鳴いている。
「おい」
目覚めには最高の朝だね、って、うん？
「おいっ」
朝？ＡＳＡですか？
「起きろ！」
耳元で大きく叫ばれ、私はバッと身体を起こした。
「ようやく起きたか」
私の脇で、ギイがほっとした表情を浮かべている。
「・・・・・・おはようございます？」
「おはよう」
疑問形の私の挨拶に、普通に返してくる。
上を見上げれば、木々の間から洩れてくる朝陽。
全身に残っている、よく寝た後の満足感。
・・・・・・結論はひとつです。
「ごめんなさい寝過ごしましたあああ！！」
おそらく見張りの時間になっても起きなかったのだろう。私のバカ
バカクソバカ野郎！
ジャパニーズ土下座を披露しようとすると、ギイが慌てて私を止め
に入った。何か嫌なものを感じたらしい。
「いや、お前があまりにも気持ち良さそうに寝ていたから・・・・・
・俺が起こさなかった」
所在なさげに自分の黒髪を右手で掻き回しているギイに、私は詰め

寄った。
「ギイさああぁんん！！」
ザザ、と座ったまま下がろうとする彼を気に留めず、私は主張する。
「それじゃほんっとうに私がただのお荷物になるじゃん！」
「に、にもつ？」当惑した表情のギイ。
「そうだよ、ヒモだよヒモ！」
ヒモ・・・・・と呆気にとられた彼に私はまくしたてた。
「私が出来ることなんて今は特に何も無いんだから、せめて私にも出来ることはやりたいの！だからどんなに気持ち良さそうに寝てても、これからは叩き起こして下さいっ」
そうだ。私にしかできない事なんて、この世界ではまだ何も無い。
それは、向こうの世界でも同じだったけど。
「ヒモは嫌だ・・・・・・」
だからこそ、出来ることはしたい。
俯いた私の上から声が降ってきた。
「――――――わかった。俺もお前を子供扱いしないよう気を付ける」

こどもあつかいて。
私、ガキだと思われてたの！？
ええー、とギイさんを見上げると、いたって真剣なお顔。
ある意味、ヒモより切ねぇ・・・・・・。

爽やかな朝の陽光が射し込む中、私は「オ、オネガイシマス・・・・・・」と彼に頭(こうべ)を垂れたのだった。

野宿した場所を離れてから2時間程経った頃。

私達はようやく森を抜けたところに流れていた川で食事を取ることにした。
「長くてなるたけ真っ直ぐな枝を2本持ってきてくれ」とギイに言われ、森の入口でそれらしい枝を探す。
「お、これ良くね」
見つけた枝を振り回しながらギイの所へ戻ると、彼はザックから取り出した細い縄をほぐして、更に細い紐へと変えていた。
「はい、持ってきたよ」
「すまない」ギイは枝の先に細い紐を結び付ける。・・・・・・綺麗な指してますね、おにーさん。羨ましいなオイ。
完成したものを見て、私は声を上げた。
「釣り竿だ！」
どこから見ても、正真正銘の釣り道具である。
餌はどうするんだろ？と彼を見ると、荷物をゴソゴソして干し肉を取り出した。
小さく引き裂いて、糸の先に付ける。
緩やかな流れの川にそれを投じると、あとは2人して獲物がかかるのをのんびり待つだけとなった。

――――――数分後。
ピクピクッ、と糸が引っ張られる感覚。
「キター！」
思いっきり引くと、水上に魚が跳ねあがった。
そのまま地面へと落ちる。
「獲れたよー」ギイに自慢すると、ギイが不服そうに自分の釣り竿を眺めた。と、糸が水の中に引き込まれる。
ほどなく最初の一匹を釣り上げたギイは、ちょっとドヤ顔で私を見た。少しムカっとする。
くっ、私の本気見せちゃる！

その後、私とギイは合わせて３０匹ほどの魚を釣り上げた。
「うわー、３匹負けた」
悔しさを滲ませてギイを見ると、フフンと言われた。
「しかし、釣り過ぎたか」
こんもり山盛りになった魚を見て呟く。
「大丈夫大丈夫ー」
さっきから腹ペコだった私は、上機嫌でそう返した。
昨日より小さくたき火をつくり、魚を枝に刺して焼く。
食欲をそそる匂い辺りを漂い始め、私とギイは揃って魚に手を出した。
また火傷をしないように、フーフーと冷ましてから魚にかぶりつく。
「おいひい」
皮がパリッとしていて、塩無しでも素材のおいしさで充分イケるね！
しっぽの方が締まっててまたうまい。
食いきれるか？と言っていたギイもたくさん食べたので、魚はあっという間に無くなってしまった。
火の始末をしてから、ごろりと横になる。
昼時になってきたので、ぽかぽかとして暖かい。
あふ、と欠伸をすると、「寝るなよ」とギイから釘を刺された。
らじゃーです！
でも、満腹だし陽射しに包まれてるし・・・・・いかん、寝そうだ。
意識を保つために、少し離れたところに座って川を眺めていたギイに話しかけた。
「ねーギイ」
ギイがこちらを向く。
「この世界に魔法って存在するの？」
そう、これはずっと気になっていた事だった。

だって、王道じゃないですか。
異世界といったら魔法！
水の眷属とか、光の性質とか！
「あぁ、ある」
ギイはあっさりと言った。
「俺も多少は使えるが、やはり向き不向きがあるらしい」
「えっ、魔法使えるの！？見たい！」
超見たい。
しぶっていたギイだったが、私がうるさくせがむと承知してくれた。
「リア　アルテ」
言葉と共に、ギイの右の手のひらに輝く球が浮かび上がる。
「ふおおおおおおおおおおおお」
ま　ほ　う　だ
パネエエェ！！
目をキラキラさせている私に、ギイが「リツの世界には魔法が存在しないのか？」と訊いてきた。
「うん。少なくとも、私の知っている範囲では」
ちなみに、さっきの光の球はギイが言葉を唱えると消滅した。
「そうなのか」
興味なさそうに呟く彼に、私は上半身を起こしてしゃべりかける。
「私に魔法教えてくれない？」
使えるようになりたい！そしてなりたい！
「えー・・・・・・」
もろに面倒くさそうな表情をしたが、目の輝きをパワーアップさせた私を見ると、ため息をひとつ吐いて腰を上げた。
「じゃぁ、歩きながら」
「お願いします師匠！」
どこまでも付いていきます！

私は飛び跳ねたいような気持ちで、ギイに敬礼のポーズをとった

のだった。

さかなはやっぱやきたい（後書き）

いつまでたっても町につかない・・・・・・orz

ふぁんたじーにまほうはつきもの（前書き）

お気に入り登録、評価ありがとうございます！＾＾

ふぁんたじーにまほうはつきもの

川のせせらぎが、だんだんと遠ざかっていく。
歩みを進めながら、ギイが口を開いた。
「魔法の使い方だが・・・・・・」
待ってました！
隣りに並んで歩きながら、次の言葉を待つ。
「まず、自分の中の魔力を見つける」
そこでギイはいったん言葉を切り、ゆっくりと続けた。
「それには精神を集中させ、気を腹に溜めなくてはいけない」
ほうほう。
なんか、武道みたいだな。
「すると体の中に温かなエネルギーの玉が現れる」
それが魔力だ、と彼は言った。
私は真剣に耳を傾け、聞き役に徹している。
「まぁ、その魔力を見つけるのも一苦労なんだが・・・・・・」
「へー、そうなんだ」
「あぁ。で、そのエネルギーを魔法として発動させるために、言葉が必要になる」
詠唱ってやつですね！
「その言葉だが、真の意味を理解していなければ、ただ唱えても発動しない」
「ま、真の意味って？」
私は（こんな。∀。＊）顔をしていたと思う。
ついに魔術発動の方法が！！
５歳の時から憧れてた、「魔女になる」という野望がアァ！

「・・・・・・説明できない」
「――――――へ？」
間抜けな声を漏らす。
例えば、と彼は話し始めた。
「俺がさっき使った「リア　アルテ」って魔法があっただろう？あれは魔光球を生み出す言葉だ」
ランプよりも長持ちして、火傷することもない。
「だが、「リア　アルテ」の真の意味を他人に説明することは誰にも出来ない。自分で悟るしかないんだ」
悟る、ですと。
「ぼんやりとしたイメージなら伝えることが出来るが、ピッタリの説明が思いつかない」
そう言った彼に、私は動揺しながら頼む。
「ぼ、ぼんやりでいいから、おお教えてくださいっ」
お願い師匠！
んー、とギイは顎に手をあてて考え込んだ。
「・・・・・・こう、ふわっとした感じで、ぽわんとした」
「ぼんやりにもほどがあるわ！」
ついツッコんでしまった。
ムッと眉を寄せるギイ。
「仕方ないだろ、出来ないんだから」
かつてアルフェニア国一と歌われた魔導師が、真の意味を言語化し、書物に記そうとした事があったらしい。
彼は十月十日研究室に籠った挙句、発狂したという。
「そのくらい難しいんだ」
フン、と鼻を鳴らすギイ。
「・・・・・・ちなみに、今の魔法についての説明とかって」
「俺に魔法を教えてくれた近所のじ―さんの受け売り」
きっぱりと答えられた。
この人、自分の言葉で説明するのド下手くそだ！

思わず心の中で失礼なことを考える。

「じゃぁ、魔物とかも存在してるの？」

「あぁ、下級魔族なら結構いるな」

上級になるとそうそう姿を見掛けないらしい。

触らぬ神に祟りなしだね！まったくもって会いたくない。

「ちなみに、人間は魔族の魔法は使えない。発動条件が全く違うらしい」

その逆もまた然り。魔族に人間の魔法は使えないそうだ。

「へー」

今のも、おじいさんの受け売りなんだろうな・・・・・。

そんなこんなで話を聞かせてもらい、日が暮れかける頃私達はレバノンへと到着したのだが。

「でっけー・・・・・」

予想以上に大きな町だった。

なんか関所っぽい場所を通り抜け、うろうろと宿を探す。

夕暮れ時の町は、人々の活気でにぎわっていた。

声高に客引きをしている八百屋、何やら魔法のアイテムらしきものをかごに詰め込んで配る少女。

人の行きかう通りをいくつも通り抜ける。

「ここにしよう」

やがて、ギイが立ち止まったのはさほど繁盛も寂(さび)れてもいなそうな宿だった。

「そういや、この町にどんくらい滞在するつもりなの？」

訊き忘れてたけど。

「2日の予定だ」

スタスタと宿の中に入っていく彼に遅れまいと私もくっついていく。

入ると、そこはこじんまりとした食堂のようだった。
「2日間の寝場所をお願いしたいのだが」
カウンターの奥で忙しそうに働いているおばちゃんに声をかける。
「あいよ、一部屋かい？」
おばちゃんは手を休めるとそう訊ねた。
「いや、二部屋だ」
「私は別に一部屋でもいいよ、金かかるし」
そう口を挟むと、ギイが溜息を吐いた。
「お前、一応女なんだからもっと警戒した方がいいぞ」
一応とはなんだ、一応とは。
口をへの字にすると、やりとりを聞いていたおばちゃんが豪快に笑いだした。
「面白い客が来たねぇ。あたいの店は食堂も兼ねてるんだ、良かったら飯も食っていきな」
ふくよかな体を揺らして話しかけてくる。
「ありがとう」
笑顔で答える私の隣で、ギイがボソッと「・・・・・・二部屋は譲らないからな」と呟いた。

「あー美味しかった」
夕食を終え、私はベッドに飛び込んだ。
おばちゃんのご飯はとてもうまかった。素材のままも無論イケるが、やっぱし味付けされた料理を食べると生き返った気がする。

しばらくベッドの上でごろごろした後、シャワーを浴びに起き上がった。
シャワールームは下の階にあるので、借りたタオルと服を持って外に出る。
夕餉の時の食べっぷりがよかったせいか、気前よくおばちゃんが貸してくれたのだ。
2階から階段を下りていく途中でギイに会った。
黒髪がいつもより艶を帯びている、どうやらシャワーを浴びてきた後らしい。
「明日は市場に行って、色々と物を調達する」
「ん、わかった。おやすみー」
「・・・・・・おやすみ」

向かったシャワー室は人気が無かった。元々女性客が少ない上に、時間帯が遅いせいだろう。
ちょっと熱めの湯で念入りに汚れを洗い流す。なんだかんだ言っても年頃の娘なので、汗や埃が気になっていたのだ。
「ふー」
頭をタオルで拭きながら階段を上がり、自分の部屋に向かう。
おばちゃんの貸してくれた服は、いい具合にゆったりとしていた。
再度ベッドに飛び込むと、仰向けになる。

「――――――『精神を集中させ、気を腹に溜める』、かぁ」
不意に昼間のギイの言葉が脳裏をよぎった。
「いっちょやってみますか」
グッとまぶたを閉じ、深く息を吸う。
腹に手をあてて、深呼吸を繰り返した。
すーはー。
すーはーすー。

・・・・・・ぱちっ。
さっきと変わらず木の天井が見える。
「だあああぁぁあ、出来ない！！」
堪え性が無いって言わないでくれ！寝オチしそうになるんだって。
「大体、異世界から来た人間はすんごい魔力があるって設定じゃないのか」
ことごとく私の期待を裏切ってくれるな！
「ふん、もういいっ」
体にシーツを巻き付けて、くの字になった。
えーい、いじけてやる。

ゆっくりと目をつむると、眠気がやってくる。
ん？なんか、腹のあたりがみょーにあったかいよう、な・・・・・・。

何とも言えない違和感を感じたが、眠りに抗えず私は夢の中に引き込まれていった。

ふぁんたじーにまほうはつきもの（後書き）

１１月１６日、少し加筆しました。

しょっぴんぐはねんいりに

次の日の朝、寝ぼけ眼(まなこ)をこすりながら下へ降りていくと、ギイは既に食堂に来ていた。
「おはよー・・・・・・」
「おはよう」
灰色のシャツに黒いズボンの彼は、明瞭な声で返す。
「おはよう。よく眠れたかい？」
カウンターの向こうから話しかけてきたのは恰幅の良い宿のおかみさんだ。
「おはようございます。たっぷり寝れました」
ギイの向かいの席につき、おばちゃんの出してくれたお茶をすする。
うーん、熱いお茶が目覚めによく効くぜ。
その後、トーストとベーコンエッグをたいらげ（もちろん、とてもおいしかった）私達は市場へ向かった。
私は昨日のうちに宿で洗濯した制服姿である。まだちょっとしめってるけど、大丈夫だ、問題ない！
日が高い時間帯だからだろうか、昨日街へ入ったときよりも人通りは少なかった。
それでも、市場に近づくと賑やかな人の声や音楽が聞えてくる。

「はぐれるなよ」
市場の入口で、ギイが私に話しかけた。
「らぢゃーです」
結構な数の人が行き交っているので、心配ご無用！とは言えないが。っていうか、私ガキ扱いされてね？
確かに、右も左もよく解ってないような感じだけどさっ。
・・・・・・左右も解らないんじゃ、心配されるよな、うん。

「どうした？」
自問自答していた私の様子を不審に思ったのか、ギイが顔を覗き込む。
「あ、ううん。何でもない」
さぁ、いざ行かん！
上機嫌で歩き始めた私の背後から、「俺を置いていくな！」という声がかかった。

「・・・・・・なぁ」
「んんー」
「まだなのか？」
「うーむむ」
疲れ切った気配の彼の言葉を聞きながら、私は悩みまくっていた。
あの綿のシャツはあんまし出来が良くないし、フランネルっぽいのは色が派手すぎる。
「――――――あ、これだ！」
いいもんみーっけた。
「へぇ、お嬢ちゃんお目が高いな」
疲れた様子のギイに、何故か憐れむような眼差しを注いでいた服屋のおっちゃんが私の方に向き直った。
私が手にしているのは、きれいな萌葱色をしたトレーナーのような服である。
「ありがと。これいくら？」
「１５０リグってとこだ」
付け加えておくと、私達が泊まった宿は一泊３５０リグだ。ギイによると、ここら辺では相場より少し安いとのこと。

高すぎる、と私が文句を言おうとすると、ギイが「もう少し安くならないか」と声を上げた。
「そうだなぁ・・・・・・。にーちゃんの苦労に免じて、ここは１００リグで」
「ありがたい」
どうやら商談成立のようである。苦労ってなんだろ？
私も乙女の端くれなので、ちょおぉっとばかり買い物選びに時間がかかったかもしんないけど・・・・・・。
せいぜい１，２時間である。

「もう少し早く選んでくれ」という彼の絞り出すような声に素直に従い、私はなるたけ急いで２，３枚のシャツとズボン、そして保温に優れたローブと頑丈な靴を買った。

「――――――これで全部、か・・・・・・」
夕暮れが近づき、鳥のさびしげな鳴き声が聞こえてくる。
「あー楽しかった！」
「よかったな」そう返すギイの声が暗い。

あ、大切なものを忘れてた。
「そういえば荷物を入れるザック、」
言った瞬間、深碧の瞳が深い悲しみを帯びたような気がした。
「・・・・・・ギイに選んで欲しいなぁ、なんて」
申し訳無さから、そう提案してみる。長々と買い物につき合わせたせいで、どうやら彼のＨＰは底を尽きかけているようだ。

「・・・・・・俺が？」
彼はきょとんとした。
うん、と頷くと「だが、お前の気に入るか解らないし・・・・・・」と困ったように返してくる。
「いいの。ギイが選んだのが欲しいんだから」
きっぱりとそう言うと、ますます驚いた表情になった。
「いいのか？」
「いいってば」
「――――――解った」
そう言って、かすかに唇を笑みの形にした男に思わず見惚れる。ちょっと微笑んだくらいですごい破壊力だな！

ギイにくっついて旅グッズを売っているところへ向かうと、彼は中に入って品物を眺め、ためらわずに一つを選び出した。
「これにしよう」
彼の手にはうろこの付いた革で出来たザックが握られている。
「え〝っ」
何の動物だろう・・・・・・思わず声がこぼれる。
「頑丈そうだろう」誇らしげなギイには悪いが、アレを持って旅するなんて・・・・・・私には出来ない！
「もーちょっとこう、違う感じのとかは？」
「じゃぁ、これ」
選ばれたのは、ちっさい棘のいっぱい生えているザック。
「なんていうか、もう少しソフトな」
「これはどうだ？」
黒い光沢を放つ、なめらかな曲線を描くザック。
――――――とある昆虫しか思い浮かびません。
「いやだあぁぁ！」思わず涙目になる。
「俺が選んだのがいいって言ったじゃないか！」
「言ったけど、それだけは無理――！！」

「なっ・・・・・・、この光沢の何が悪い！？」

私とギイの不毛な言い争いが、市場の一角に響き渡ったのだった。

しょくたくはせんじょう？（前書き）

ちょっとシリアスな雰囲気を出そうと、頑張ってみましたが・・・・・・。

しょくたくはせんじょう？

あの後、店のおっちゃんに「お客さん、静かにしてください！！」と怒られた私達はおとなしくデニムのような生地で出来たザックを買い、すごすごと店を出た。
ちなみに買ったザックは、私がギイを上手く誘導して選ばせたものである。

ガスッ！とザックの山に手を突っ込んだ彼の指先には、私のお目当てのもの。
「あ！ギイそれ素敵！」
「え・・・・・・これか？」
「うん！さっすが、センスあるぅ！」ここぞとばかりに褒める。
「そうか？」ちょっと照れ気味のギイ。
「数あるザックの中からこれを見つけるなんて、只者じゃないっ」
褒めすぎても怪しいので、やり過ぎないよう気を付けた。
結果、ギイは機嫌よく会計台に向かっていく。
――――――――案外単純な奴かもしれない。と思った私だった。

宿へ向かう帰り道の途中、私はギイに素直にお礼を言った。
「何もかも買ってくれて、本当にありがとう」
今の私は一文なしなので、服や靴の代金は全部ギイの財布から出してもらったのである。
「いや、気にするな」

素っ気ない口調のギイ。
「そういや、どうやって稼いでるの？」
何となく傭兵かと思っていたのだが。
「村人に頼まれて、村を荒らす魔獣を退治したりしている」
へー。
「あとは盗賊から巻き上げたり」
・・・・・・ん？
何だか物騒な言葉が聞えたような。
「そうなんだー。すごいね」
りつは　スルー　をつかった！

「――――――国を出る時に貰った金も残っているしな」
少し声のトーンを低くして呟かれた言葉。
え？と訊き返そうとしたら、彼は誤魔化すように「着いたぞ」と言った。
会話するうちに宿まで来ていたらしい。
さっさと中に入っていく背筋の伸びた後ろ姿を、私は黙って見つめた。

机に並べられた、ほかほかと湯気を立てている料理達。
「んー、おいしい！」
香草をふんだんに使ったステーキの肉汁が、じゅわっと口の中に広がった。
「・・・・・・お前って旨そうに食うよな」
向かいの席に座っているギイが、少し呆れた調子で言う。
「だっておいしいし」
じゃがいも（っぽい）と茄子（なす）（らしき）をミートソースで絡めたの

を頬張りながら返事をする。
「ふーん」気の無い様子で返事をする彼の皿から、さっとソーセージをかっさらった。
「なっ」ギイが声を上げた時には、既にソーセージは私の口の中。
「ふひほひへるほーははふひほほ！」
「何言ってるかさっぱり解らん」
胸を張ってみせるとギイがハァ、と軽く吐息をつき、次の瞬間彼のフォークがきらめいた。
「あっ！」
私の皿にあったステーキがっ。
「ぐぬぬ・・・・・・」
口元を拭(ぬぐ)って、ギイがニヤリと笑う。
様になってんのがますますムカつく！

「小癪(こしゃく)な！こうなったら目に物見せてやる！」
「さっきは不覚をとったが、お前の手の内など丸見えだ」
キンッ、カカッ。
鋭くフォークを突き出すが、ことごとくギイのナイフに防がれる。
ぬあああぁぁ！

「――――――ちょいとあんた達」
不意に、重量のある声が落ちてきた。
ビクッとして声の聞こえた方を向くと、仁王立ちで立っているおかみさん。
・・・・・・こ、恐い。
手にしていたフォークがポロリと落ちる。
「子供じゃないんだから食べ物で遊ばない！！」
「「すみません！」」
落とされた雷に、私とギイの言葉はきれいにハモった。

「今日はよく怒られる日だったなー」
ボスッと音を立ててベッドに飛び乗ると、私は天井に向かって呟いた。
乾き切っていない黒髪が白いシーツに広がる。
私はフッと身体の力を抜き、まぶたを閉じた。
魔力を探す練習である。
昨晩、眠りに落ちる寸前に何か感じた気がするようなしないような。
深く息を吸い、ゆっくりと吐く。
『温かなエネルギーの玉』かぁ・・・・・・。
ふわふわしているものを、丸めるような感じだろうか。
取り留めのないことを考えながら、スゥ、と息を吸った時だった。

――――――――ドクン

こきゅうができない。

辺りの空気が消失したかのようだった。それと同時に、身体の下に感じていたベッドの気配が無くなる。
私は宙に放り出された。
「・・・・・・っ」
微かに空気を吸えるようになったが、声を上げようとしても喉が動かない。
目を見開いた筈なのに、景色は真っ暗でまぶたを閉じていた時と変

わらなかった。
――――――何が、起きた？
落ちつけ、落ちつけ私。
必死に冷静さを保とうとしながら、トリップした時のように手足をバタバタさせてみる。
黒々と塗り潰された闇は何も変わらない。酸素が薄いせいかすぐに息が切れた。

突然、漆黒の中に声が生まれた。
「・・・・・・虚無の空間で生きている、か。流石は時の軸を飛び越えた者」
この暗闇よりも深く響く、冷え切った声。
それが耳に届いた途端、意志と関係なく肌が粟立(あわだ)った。

何だかよく解らないけど、すっごくまずい気がするううぅ！
「汝が抱えし魔力は、我等の存在すら脅かす。悪いが封印させて貰おう」
クッと嗤った気配がした。
「封じ込めの威力で、死なねばよいがな」
「――――――！」
生命のぴんち・・・・・・だと？って私のバカそんなネタ振りまいてる場合じゃないだろって、
「っ！」
身体の中心から何かが抜き取られていく様な感覚。
吹き荒れるような喪失感が私を襲った。

いやだ。
嫌だあああぁぁぁぁ！！

必死に手を振り回し、脚を蹴りあげた。酸素が薄いなんて関係な

い、ただ必死に全身を使って抵抗する。

奪われたものの残滓を、身を捩って守る。

制御出来ない感情の爆発が、周りを覆う晦冥(かいめい)を揺らしたような気がした。

「なに、を・・・・・・!?」

驚愕した叫びが聞こえ、深闇の声が低く呻いた。

――――――行って。向こうに、行け!

声が出せない分、頭の中で怒鳴る。

やがて、指の先から痺れていくのを感じ、私はぐったりとして意識を失った。

しょくたくはせんじょう？（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。お暇でしたら、感想など書いて頂けると嬉しいです＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3497y/

GLUTTONS!

2011年11月18日13時18分発行